

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	長詩 詩二章 : 文苑
Author(s)	紫秋
Citation	龍南會雜誌, 1 3 3 : 4 0 - 4 3
Issue date	1909-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5831
Right	

それに、前には、前には、又暗い穴が……………。

道をまたかわた。それでもバタ／＼と全じ音が、尙り背後の方に…………前方には恐しい穴が…………。驅り立てられた鬼の如うに、盲目滅法に驅け出した。それでも尙り全じた。…………音が…………。

穴が…………。あ…………。

「待て！ 何方どこに行つたつて仕方がない、一つ驅だましてやれ」矢庭やにはに地に突伏つひした。

女は背後に來て如鬼にようきと立つた。間あはひ、二歩もあらうか。音はしない、何となく其處に立つてる様に感ぜらるゝ。すると今度は、今まで遠くの先方さきで、漂動つどうてゐた暗い影が、一步二歩、私の方に寄つて來るではないか…………。

神よ！、思はず叫んで、四邊を膽まはした。

女は眞下に私を見据みゐてゐたが、齒の抜けた口許くちから齷はきを出して、ニヤリと凄く笑つた。

「あゝ、遁にげ路はないのか！、No escape」

(ツルゲチエフ散文詩老女)

長 詩

詩 二 章

溫 室

紫

秋

青白き月光の雪崩の吐息

いと廣き天井の硝子の板ゆすべり入る温室は蒸氣に曇る。

口^{くち}みたる室内の空氣の中に

音もかく水の玉また玉を突く

噴水^{ふきず}は外光の香りに咽び

そのなごり極光の色に枝垂れぬ。

温室の闇の奥、夢とつらなる

大理石^{大理石}の花壇には花のかすかす……………

アチモンは火の絨^{じゅう}のギオロンかなで、

毛布もて心の藏、摩するひびきの

アマランス。あるはまたほのゝ音色に

香を醸す沈丁花。笑ふ茉莉花。

深き夜の會堂の高き窓より

白髪のお牧師、火星をわがむ

眼つきして、うるめるはハイアシンスぞ。

文

忍冬の花も匍ふ鋪石の上へ
白き玉かろやかにしづ心なく
落命す。——白光のカメリアの花。……

わたりわたりは噴水の水も纏れて
あまぬるき室内の空氣は揺らぐ。

今ぞ聞く温室の底の下界の
地下林をさまよへる尼の吐息を。

四十二年九月二日

響

けたままし車輪の響。……

走り行く山陽線の汽車の夜は今を明けぬる。

紫の朝の光りは内海の霧を照らしぬ。

かなたなる山の中腹の樅の林に

ほの見ゆる西洋館に青き瓦斯の光めしひ、

鳩の一群しら／＼と隋圓の夢を描きて翔ける。

苑

夢淡く、かばんに凭る子、幻に三角塔を築ぐ。

空模様あふぎ見て何かさゝやく、凹眼の青き男。

綿火薬爆發、都會炎上の報知に

驚愕のあはれ老人。相場師の巧みの談議。

さあれ一人の美しき少女子は長き袖もて籠を掩ひ、

うれはしげにも胸のへに支ふれど

加那利亞は室内の動搖に驚きて

黄金の絃の音を絞る、羽搏ち騒げり。

あざけり顔に吹き鳴らす汽笛を聞けや。――

『今の世の文明は巨大なる病院の姿に似たり。』

(四十二年九月三日)

俳句

紫溟吟社句録

返り花

凶年誌木々返り咲くと記しけり

滴人

傳説も櫻一樹や返り咲く

全

煙毒に返り咲く木の命かな

全

返花葉と誤りつ繪にしあれば

此君子

よく咲く木なりしが狂ふ移植して

全

世に聞わねど佛跡や返り花

水郷

祭主交々昇位の沙汰や返り花

青給